

母の 637 ひろば

doshinsha / haha no hiroba

ぼろり家族③ 憲法記念日／落合由利子 2
 わたしが読んだ童心社の本④／土居安子 3
 コウノトリが帰る場所／佐竹節夫 4-5
 新刊紹介／中脇初枝、内川朗子 6
 だいすき！かみしばい／橋村孝子 7
 受賞のお知らせ 7

イラスト／織茂恭子



記憶のない人に向けて絵本を紡ぐ とよたかずひこ

今年2月、東京都新宿区にある海城中学校に講師として呼ばれた。課外講習—社会的な問題に関心を拓くステップと銘うっての講座である。海城学園の教員有志が、通常の授業の枠組みに風穴をあけてみよう企画された特別授業で、今年度のテーマは『生きること 働くこと 考えること』。他の講師は弁護士、新聞記者などだが、中1～3だろうと私は読みきかせをするしかない。日頃の勉強から解放されて、一息ついてもらうのもよからうと学校を訪ねた。「スズキ!」「ゴトウ!」「ヤマダ!」…授業開始前に担当教諭が点呼、野太い声が返ってくる。私も高校は男子校で過ごしてきたので、敬称なしの出欠とりがなつかしい。

紙芝居『はい、タッチ』『でんしゃがくるよ』を演じながら彼らの様子を探る。いい、いいのである。突っこみあり笑いあり、絵本『どんどこ ももんちゃん』で、ももんちゃんがクマを倒す場面ではオーと歓声をあげて拍手をくれる。

80分の授業はあっという間に終わった。質疑応答の時間が少なく、ひとつしか受けることができなかった。絵本創りを仕事としてとらえる観点から、彼らからは相当な質問が出たであろうと思うと、当方のミスで残念なことをした。

今まで小学校で授業をすることは何度もあった。終了後、何日かたって全員が感想文を送ってくださる。ありがたいことではあるが、講師をおもんぱかって本音のことは書かれていない。低学年は「ありがとう」「おもしろかったよ」「またきてね」の3語に集約される。今回は海城中学生だ。感想をききたい。後日、先生にお便りし、生徒さんの名前は伏せていいから全員のレポートのコピーを送ってほしいとお願いした。送付されてきた一枚一枚じっくり読ませてもらった。濃い中身でさすがであった。「…絵本を読んでもらったのは保育園時代以来、とてもなつかしく思った」というのから「…今さら絵本がよ…」「…絵本は作者が幼児の喜ぶような内容のうすい本を出してもうける仕事というような失礼な偏見があったが…」で始まる厳しい意見までは予想通り。その中でうれしかった感想は「…家に帰ってお母さんに話をしたら、それ、むかし読んであげていた絵本だよと言われてびっくりした。何にも覚えていない…」(以上原文ママ) そうなのだ。私は記憶に残らない小さな人たちに向けて、一所懸命絵本創りをしているのだ。

(豊田 一彦／絵本作家)

創業60年記念

わたしが読んだ童心社の本 4

地獄が

芸術になるとき

土居安子

どい やすこ／大阪国際児童文学振興財
団 総括専門員。読書活動や日本児童文
学史に関する研究を行う。共編著書に
『子どもの本100問100答』（創元
社）『明日の平和をさがす本』（岩崎書
店）がある。



田島征彦／作

「とさい」とうさい。「この絵本は読み始めると十
五分はかかるという大作。けれど、三歳から大人ま
で息をつめたり、大笑いしたりして飽きることはあ
りません。一九七八年に出版されたこの本がロング
セラーなのは、いくつもの理由が考えられます。」

まずはストーリー。地獄へ行かされた四人の庶民
が知恵と特技を使って権力者である鬼をぎゃふんと
言わせて自力で生き返るといふ痛快なストーリーは、
反骨精神とユーモアにあふれています。これは、も
ちろん、上方落語の持つおもしろさが絵本として保
証されているということになります。

そして、その題材が「地獄」であるということ。
子どもは「死」に対して、怖いけれど知りたいとい
う願望があります。この絵本はそれに答えつつ、
「生き返る」という結末によって、子どもの不安感
を払拭してくれるエネルギーを持っています。

田島征彦さんは、米朝師匠の落語を繰り返し聞き
ながら、まず、絵を創り、最後に言葉を入れたと言
っています。この絵本は、落語を元にしなが、落
語の語りを絵本の語りに換骨奪胎かんとつたいたいしています。つま
り、「挿絵のある本」ではなく、「絵本」という一つ
の芸術作品になっているのです。絵が豊かな物語を
語り、擬音語や擬態語、会話など、言葉でしか表現
できないことだけが、文字で表現されている、文字
が絵の一部として配置され、ときには視覚的效果の
ために使われている、絵本というメディアを強く意
識した作りになっています。

その絵は、型絵染という日本の伝統的な職人技を

用いながら、右から左へと視線を移動させ、ページ
をめくらせる力を持つ躍動感あふれる画面作りがな
されており、「染」というどちらかといえば「静」
を思わせる画法を「動」へと転化させていることで、
内に秘めた力や深い伝統文化に根差した新しい創造
を感じさせます。それは、古くて新しい個性的な鬼
の描かれ方にも読み取ることができます。

一方、関西弁で語られていることや、おならや糞
尿地獄が出てくることから、ユーモアのセンスたっ
ぷりの作品になっています。おならや糞尿が下品さ
につながらないのは、人間が「生きる」ための必然
として描かれているためであり、排泄で笑わせよう
とする昨今の悪趣味な絵本とのへだたりを感じます。
旧大阪府立国際児童文学館が原画を所蔵していま
したが、現在は大阪府教育庁に移管されています。
原画の透き通るような色と研ぎ澄まされた線は何度
見てもほれほれします。

二〇一一年に大阪府立大型児童館ビッグバンで田
島征彦絵本原画展が行われたときには、筆者が『じ
ごくのそうべえ』を読んだ後、子どもたちがいろい
ろな地獄とそれを四人の主人公が切り抜ける方法を
考え、発表するというワークショップを行いました。
子どもたちは夢中になって考え、この絵本からいか
に想像力が広がるかを目の当たりにしました。

一九七〇年代の日本の絵本にこの一冊があり、五
冊ものシリーズが出版され、今も読み継がれている
ことは、「絵本は芸術だ」ということを理屈ぬきに
表していることだと心強く感じています。

一度、日本の空から姿を消したコウノトリが、今、よみがえろうとしています。兵庫県豊岡市などの施設から放されたり、野外で繁殖した若鳥たちが各地を元気に飛び回り、しかも年々仲間を増やしているのです。

みなさん、コウノトリってご存じですか。よく赤ちゃんを運んで来る鳥と言われますね。でも、それはヨーロッパにいるコウノトリのこと。日本で見られるのはひと回り大きく、羽を広げると二メートルにもなり、クチバシが黒く、群れることをしない、極東だけにすむコウノトリです。古くから吉鳥とか瑞鳥と言われ、めでたい鳥の象徴とされてきました。なのに、実物はあまり有名ではありません。なぜ？ 今日よみがえろうとしていることの意義なども含めて、少し探ってみましょう。

コウノトリが暮らせる環境

コウノトリは動物食です。植物は食べず、水辺を歩いて魚やカエル、昆虫などを捕まえて丸のみします。スマートで上品な風貌に似合わず、ヘビやスッポンもペロリと平らげ、しかもびっくりするほどたくさん食べます。ですから、コウノトリが暮らすには、多様な生きものがた

コウノトリが 帰る場所

佐竹節夫

さたけ せつお / 1990年、豊岡市コウノトリ保護増殖事業の担当となり、コウノトリと共生するまちづくりに携わる。2008年、市役所を退職。現在「日本コウノトリの会」代表。

くさんいることが前提条件となります。でも、それだけでは不十分。なぜなら、彼らは繊細で気難しく、その上ごく小さいので、採食できる環境を限定させているんです。水深の浅い、明るい湿地でなければなりません。

現在のコウノトリの生息地であるシベリアや中国東北部、越冬地の中国東南部の環境を見てみましょう。そこには地平線まで続く大湿原がいくつもあり、さぞ食べ物には困らないと思いきや、コウノトリの数は二千五百〜四千羽しかありません。このままでは絶滅しかねない状態が続いています。水辺はとてつもなく広いのに、彼らのお気に入りの採餌場所が



海藻を採る人にあいさつ / 奄美大島



田んぼで食事 / 滋賀県長浜市

少ないんですね。

では、わが日本はどうでしょう。国土はぐんと狭く、しかもその七割は森林です。にもかかわらず、江戸時代までは各地で暮らしていました。日本の里地には田んぼがあるからです（水深が浅く、明るい湿地です）。田んぼとその周辺が層の厚い、多様で豊かな生きものの世界をつくっているからです。密度が濃いんですね。機会があれば田植え後の田んぼの中をのぞいてみてください。稲にのぼってきた無数のトンボのヤゴがいつせいに羽化する姿に感動しますよ。田んぼはお米を収穫するために人間が手をかけて管理していますが、同時に多様な生きものを育てているんですね。人々が稲作を行うことで、コウノトリは狭い日本にすめるようになったのです。

じゃあ、田んぼさえあればすめるのかというと、そうでもありません。舞い降りるのは人里です。そこでどう迎えられるかによります。歴史を見ると、崇められたり、農業への害鳥扱いされたり、時代によって様々ですが、どちらのときもほとんどすむことはできません。人の暮らしが落ち着いていて、自然に対して手を出しすぎなかった江戸末期ごろが、コウノトリにとって平穏なときだったのではないでしょうか。そのころ、浅草寺に

も営業していたと言われています。糞などの害を被ったとしても「仕方ない」と見逃し、「追いつくまではしなくてもいいのでは」と寛容で、むしろ観察して楽しみ、やがてコウノトリも安心して集落に溶け込むように暮らしていく——そんな感じだったのではないかと想像します。豊岡での昭和初期までが、まさにそうでした。

コウノトリは今

明治時代になり日本が近代化の道を進み出すと、一気に乱獲や自然環境の悪化が進み、コウノトリは減少の一途をたどります。そして一九七一年、唯一の生息地となっていた豊岡市で最後の一羽が收容され、ついに日本の空から姿を消してしまいました。餌生物が^{えいぶつ}ふんだんにいた田んぼは効率化の名のもとに構造が変わってしまい、農薬が大量に散布されて生きものの姿がなくなり、コウノトリを大らかに受け入れる風潮はなくなっていたのです。

長い年月が経ち、二〇〇五年、ぼっかり空いていた豊岡の空にコウノトリが帰ってきました。兵庫県と豊岡市で半世紀以上にわたって取り組んできた飼育の個体が、満を持して放鳥されたのです。外

では、「もう、農業には頼らない」と環境創造型農業に取り組む農家、いろんな水辺をつくって生きものを復活させようと汗を流す人たち。少しずつ迎える準備も進んでいました。

結果、今では十一組のカップルが成立し、毎年ヒナを生み、育てるようになりました。若鳥の飛翔範囲もあつという間に北海道から沖縄、韓国まで広がりました。その数も百羽を超えるに至っています。飛翔先で出会った若鳥たちに恋の花が咲くことも増えそうです。隣町・京都府京丹後市を皮切りに、福井県越前市、徳島県鳴門市、島根県雲南市で次々とカップルが誕生しています。鳴門、雲南では、ヒナも生まれました。全国・韓国をひとつ飛びする彼らの飛翔力の強さを感じるると同時に、何としても種を存続させようとする懸命さを感じています。

コウノトリを迎える人々

突然にあなたのまちにコウノトリが舞い降りてきたら、どうしますか？ みなさんの様子を聞くと、見知らぬ大きな鳥を目の前にしたとき、はじめは「何だ？あの鳥は」と驚くようです。でも、少し落ち着いてくると、うれしいことに一緒に好意的に迎えてくれます。やれやれ。



カップルの誕生／福井県越前市



ヒナが生まれた／徳島県鳴門市



ナマズを食べる／兵庫県豊岡市

各地からの便りを読んでいると、人々が次第に観察にのめりこんでいく様子がわかります。軽い気持ちで観察していたら、あの大食漢が必死に餌を探している。でも、周囲には生きものの姿は見えない。「餓死するのは」「このまから飛び去ってしまうのでは」「大きな体を電線に引っかけるのでは」……。だんだん心配になってきて、構ってやりたくなる。みなさん、コウノトリは威厳といじらしさを同居させ、人の心に染み入ってくる鳥だとおっしゃいます。

コウノトリが教えてくれる

残念なことですが、現在の日本にはコウノトリが平穩に暮らし、子どもを育てられる場所は非常に少なくなっていました。

でも、私は思うのです。コウノトリが舞い降りるのは、その地に餌だけではない何かの可能性を嗅ぎ取ったからに違いないと。環境は儼たらけただけで、ここにはこんな宝物が生きてるよと訴えているようです。コウノトリは、失ってしまった(と思う)大切なものを気づかせてくれる役目も持っているようです。「見つけたよ。ありがとう」。そして、「おかえりなさい」と迎えてやりましょう。

こどもたちが大すきな年中行事、七夕。一年に一度、どんなことでもお願いしていいとあって、こどもたちは親にも言えないお願いを、おぼえたばかりの文字で短冊に書いて、大喜びです。

そんな七夕のおはなしといえば、中国の織姫と彦星の物語が思い浮かぶのではないのでしょうか。でも、天からやってくる女性の物語は、中国だけでなく世界中で伝えられており、日本でも全国各地で、七夕の行事とともに語り伝えられてきたのです。

そんな、これまであまり紹介されることがなく、知られていなかった日本の七夕の昔話が、『たなばたにようぼう』で、読みごたえたっぷりに描かれました。作者の常光徹さんの故郷、高知の昔話で、西部^{はた}幡多地方の言葉を残して書かれているので、独特の語り口が印象的です。

中国では、もっぱら牛が主人公の若者を助けますが、この物語では、ふしぎな狐が登場します。狐の助けを得て、七夕女房を追いかけ天までのぼる主人公。野村たかあきさんの描く、天の川の力強い流れがふたりを隔てます。それほどに愛しい人と一年に一度しか会えなくなる物語を、人はなぜずっと語り伝えてきたのでしょうか。星空を見上げながら、こどもたちの喜びとは別に、そんな謎にも思いをはせてみたくくなります。

(なかわき はつえ/作家)



「たなばたにようぼう」
常光徹/文
野村たかあき/絵
本体価格1300円+税

めずらしくてふしぎな 日本の七夕物語

中脇
初枝

魔法よりも魔法みたいなこと

内川
朗子



「雨ふる本屋とうずまき天気」
日向理恵子/作
吉田尚令/絵
本体価格1400円+税

〈雨ふる本屋〉は、人間に忘れられた物語を集め、雨で育てて本をつくらしているお店。本が何より好きな店主のドードー鳥フルホン氏や、キノコのテーブルでおいしいお茶をふるまってくれる妖精使いの舞々子^{まいまいこ}さん、お客さまの望みの本を探しだす妖精たちが迎えてくれます。

ぐうぜん〈雨ふる本屋〉を訪れるようになったルウ子と妹のサラは、ここでたびたび本にかかわる奇想天外な冒険にまきこまれます。そして将来作家になりたいルウ子は、自分が大好きな本や物語について考えさせられたり、意外なことに気づいたりもするのです。

シリーズ3冊目の今回は、例えばたくさんの紙とインクでつくられた〈書からなる塔〉に入った時。ルウ子は、ここに保管された原稿用紙の物語のきれはしを、遠い未来に見ず知らずのだれかが読んだり、思わず吹きだしたりするかもしれないと想像して、それは「魔法よりも魔法みたいなこと」だと思います。無彩色の紙とインクからあらゆる色や音、香りや手触りが伝わり、手のひらの上に異なる世界が現れる、本。身近すぎてなかなか気づけない「魔法」の一種なのかもしれません。

お話をつくり、書き、読むことの意味をファンタジーでとらえなおそうとする、この物語はあなたにどんな「魔法」をもたらすでしょうか。

(うちかわ あきこ/児童文学評論家)

だいすき! かみしばい

小さな体でも強くたくましい
カヤネズミのおかあさん



「カヤネズミのおかあさん」
キム・ファン／脚本
福田岩緒／絵
本体価格1900円+税

橋村 孝子

濃い緑色に覆われた夜のヨシ原に、小さなカヤネズミのおかあさんがやってきました。もうすぐ生まれてくる赤ちゃんのための巣づくりをしに。

鋭い前歯で細かくさいた葉っぱをからみ合わせ、だれにも見つからないように工夫しながら作り上げます。そして、元気な6匹の赤ちゃんが無事生まれました。しかし大変なのはこれからです。モズやイタチが獲物をさがしにやってくるからです。おかあさんは危険を感じ、夜のうちに子どもたちを連れて別の場所へ。そこへ「ふっふっふ。まちがない。このおいは、カヤネズミだな」と、へビがにゅーっと現れます。

紙芝居を見ている子どもたちは、はらはらどきどき。へビの登場に、「あぶない!」と声をかける程に、臨場感があります。

最後は、おかあさんの気転で助かったカヤネズミたちに、みんなもほっとします。

地上1メートルにも満たない小さな世界ですが、懸命に子を守ろうとするカヤネズミのおかあさんの姿には、私たち人間も学ぶことがたくさんあります。巣づくりから出産、子育て、襲いかかる生き物から子どもたちを守る知恵と行動力。一生懸命に生きている命に、観客も素直に「がんばれ、カヤネズミ」と声をかけたくくなります。

(はしむら たかこ/みやがわ書店店長・紙芝居ピッコの会員)



本体価格1600円+税

『へなちよこ探偵24じ』
齊藤飛鳥／作
佐竹美保／絵

●第三十三回うつつのみやこども賞

七草町の駅前商店街に、その探偵事務所はある。まっ白なスーツのへなちよこな探偵が、どんな依頼も全力で解決してくれるぜ……。『うつつのみやこども賞』とは、小学校五・六年生の選定委員が一年間で四十冊の本を読み、その中から最も友だちにすすめたい本を選んで贈る文学賞です。選定委員全員から圧倒的な支持を得ての受賞です。



本体価格1000円+税

『ドンチンさんはそばにいる』
さえぐさひろこ／作
ほりかわりまこ／絵

●第六十四回産経児童出版文化賞ニッポン放送賞

ゆうくんは、ときどき思いがけないことを言ったり、言い当てたりすることがあります。「どうしていろんなことがわかるの?」と聞くと「ドンチンさんが教えてくれる」と、ゆうくん。どこにいるんだろう、ドンチンさん。自分とはちがう心の世界をもつクラスメイトを、少しずつ受け入れ友だちになっていく物語。

祝 受賞のお知らせ

6月の新刊図書!

ちいさなせなけいこ・おばけえほん)

**ばけものづかい
くずかごおばけ
おばけいしゃ
ゆうれいのたまご
はらぺこゆうれい**

せなけいこ/さく・え
本体価格 各780円+税



人にいたずらをするおばけ。ちょっとこわいけれど、子どもたちは大好きです。昔話、伝説、落語などをモチーフにした、ユーモラスなおばけたちが出てくる「せなけいこ・おばけえほん」シリーズの人気5作品が、かわいいサイズで新登場! おでかけのときも一緒にどうぞ。

怪談オウマガドキ学園

②3妖怪たちの職場見学

常光徹/責任編集

村田桃香・かとうくみこ・山崎克己/絵
怪談オウマガドキ学園編集委員会/編
本体価格 680円+税



オウマガドキ学園の生徒たちが、妖怪世界の「職場見学」に行くことになりました。「仕事」をテーマにしたこわ〜い話を13話収録。

童心社創立60周年記念

公募
のお知らせ

かみしばい作品 & 脚本募集!

紙芝居のさらなる可能性を追求するため、新しい作家の発掘を願い、創作紙芝居の作品・脚本を募集いたします。

募集期間: 2017年3月1日~2017年7月末日

詳細は童心社ホームページへ

<http://www.doshinsha.co.jp/>

読者の声

単行本絵本
だれと いっしょに
いこうかな?

得田之久/ぶん
和歌山静子/え
本体価格 1100円+税



雨の日にしかけるのは、ちょっとゆづうつ。でもこの本のことを話題にしたがと支度したりすればOK。雨の日の一冊になりそうです。

(広島県 K・K 六二歳)



イラスト/織茂恭子

2017年6月15日発行 (毎月刊)

母のひろば 第637号
定価50円(年600円/送料とも)

発行所: 童心の会
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6
株式会社童心社内
電話03(5976)4402
編集発行人: 大熊悟
童心社のホームページ:
<http://www.doshinsha.co.jp/>
フォーマットデザイン: bise inc.

定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。下記QRコードからもお申し込みいただけます。見本誌(無料)と振込用紙をお送りいたします。

見本誌に同封されている振込用紙で購読料をお支払いいただけます。手続き完了となります。購読料金は1年分600円(送料とも)。



あとがき

- 雀が随分少なくなったなど感じて何冊か本を読んでも、都会だけでなく農村でも離島でも減っている。それどころか世界規模で激減していて、農薬のせいでは、という推測もこのことです。田んぼを中心とした豊かな生態系が崩れるなどして蜜蜂も激減しているのだから、人間に影響がないわけではないですね。◎
- 大学生に紙芝居を演じた時、1人の女の子が「久しぶりにたくさんの人と一緒に笑った。それがとっても気持ちよくて嬉しかった」と話してくれました。まわりのみんなも朗らかな笑顔で、演じる前とは教室の空気が違い、紙芝居の力を感じました。上のお知らせにある「かみしばい公募」は7月末日までです。紙芝居ならではの作品、お待ちしております! ㊦